

特集の意図

多発性硬化症（MS）は日本でも患者数が着実に増えており、疾患修飾薬として既に6剤が使用可能となっている。しかし、欧米で使用可能となっている薬剤がすべて日本に上陸している状況ではなく、診断・治療においてはいまだ大きな問題を抱えたままである。本特集では疫学、診断基準、画像、認知機能障害、治療という多角的な視点から、現時点の最新知見をエキスパートに解説していただく。

特集の構成

1. 多発性硬化症の疫学 — 多発性硬化症は本当に増えているか（越智博文）

多発性硬化症世界連合（MSIF）による疫学調査で、MSの有病率、罹患率は増加傾向にあることが報告されているが、有病率、罹患率それぞれに異なる特徴も読み取ることができる。日本を含め世界各地の疫学データを詳細に参照しながら、近年の動向を解説する。

2. 多発性硬化症の診断基準 — McDonald 診断基準 2017 を読み解く（中島一郎）

多発性硬化症（MS）に現れる CIS（clinically isolated syndrome）を早期診断するための McDonald 診断基準は 2017 年に改訂され、疾患修飾薬の開始判断を平均 2～3 カ月で行うことを可能にした。本診断基準につき、誤診を防ぐためのチップスなどにも触れつつ概要を解説する。

3. 多発性硬化症の MRI — 診断ツール、バイオマーカー、副作用モニタリングツールとしての役割（三木幸雄）

多発性硬化症における MRI は上記 McDonald 診断基準においても重要な位置を占める。診断、バイオマーカー、副作用モニタリングにおいてどのような役割を示すのか、豊富な MRI 画像を示しながら解説する。

4. 多発性硬化症における認知機能障害 — どのように評価して対応するか（新野正明、宮崎雄正）

多発性硬化症（MS）の認知機能障害では注意、集中、情報処理といった機能が障害されやすいが、見逃されることも少なくない。MS における認知機能障害の評価に実用的なスクリーニングバッテリーを検討し、薬物・非薬物療法を含めたさまざまなアプローチについて解説する。

5. 今後の多発性硬化症治療の方向性 — 新規疾患修飾薬が加わって（近藤菅之）

現在承認されている多発性硬化症疾患修飾薬 6 剤を概説し、2021 年に承認が見込まれる抗 CD20 抗体 ofatumumab とスフィンゴシン-1-リン酸受容体調節薬 siponimod、さらに現在第Ⅱ相試験中の OCH について紹介する。また、これらの薬剤をもとに今後治療をどのように行うか、その基本となる考え方を提示する。